

31 『外臺秘要方』卷三十九に引用される

『明堂』条文について

木場 由衣登

『外臺秘要方』四十巻は唐の王燾によって編纂された大規模な醫學全書であるが、「明堂灸法七門」の副題を持つ巻三十九は全巻が鍼灸についての記述に終始している。特にこの巻のおよそ三分の二を占める「十二身流注五藏六腑明堂」は、『明堂』に由来する孔穴条文を中心に構成されている。この『明堂』は後漢頃に成立した孔穴書で、鍼灸治療に使用される孔穴の名称、位置、効能、鍼の刺入深度、灸の壯數、孔穴の主治などが記載されているとされる。原本は傳わらないが、その内容は『外臺秘要方』以外では、晋代の『甲乙經』、唐代の『黄帝内經明堂類成』（以後、楊上善『明堂』と称す）、日本の『醫心方』巻二等からも推定することができる。なお史志の著録として、例えば『舊唐書』に『黄帝明堂』三

巻、『黄帝明堂經』三巻、『黄帝内經明堂』十三巻などの記載もある。これら幾種の『明堂』伝本資料の相關関係は未だ明確でないが、ここではこれら『明堂』由来の条文を「明堂」条文」と称する。

『外臺秘要方』巻三十九の「明堂序」では「明堂甲乙」を「醫人之秘寶後之學者宜遵用之…」と評し、『明堂』と並んで『甲乙經』を高く評価している。実際、「十二身流注五藏六腑明堂」も、『明堂』自体の引用よりも、『甲乙經』の引用する『明堂經』条文が記載内容の多くの部分を占めていると推定される。すなわち『外臺秘要方』巻三十九の『明堂』条文は、『甲乙經』の校勘資料、古い『明堂』の復元資料という二面性を持っている。ただ『明堂』の復元という点から言えば、その中に隋唐に成立した甄權『明堂』、楊玄操『明堂』等の条文も混在しており、古い『明堂』の全體構成が不明確なこともあって、取り扱いには特別の注意を要する。

『外臺秘要方』巻三十九の『明堂』条文では鍼の刺入深度が記載されておらず、また全ての孔穴が十二經脈に配當されており、『甲乙經』と異なる大きな特徴となつ

ている。また、「轉穀」「飲邨」「應突」「脇堂」「旁庭」「始素」「膏盲俞」等の孔穴も『甲乙經』に未見のものである。更に『外臺秘要方』卷三十九を楊上善『明堂』、『甲乙經』と比較すると、次のようなことが判明した。

①楊上善『明堂』では手太陰肺經に置かれていた「中府」が、『外臺秘要方』では脾の經脈に属す。

②「尺澤」の主治条文において、楊上善『明堂』では「心膨膨痛。肘痛。喉痺」とあったものが、『甲乙經』では「心膨膨痛。少氣不足以息。尺澤主之」、「肘痛。尺澤主之」「喉痺。…尺澤…主之。」と別の条文に分かれており、『外臺秘要方』では「喉痺。上氣。舌乾脇痛。心膨膨痛…」とあり、「肘痛」は最後に置かれている。

③「魚際」の主治条文において、『外臺秘要方』に「虚極。洒洒毛起惡風寒。舌上黄。身熱。欬嗽喘。痺走胸背。不得息。頭痛甚不出汗」とあり、楊上善『明堂』に「舌上黄。身熱爭。則喘欬。痺走胸應背。不得息。頭痛不堪。汗出而寒。及陽明出血」とある。『明堂』条文ではないが、これらと對應する条文として、『甲乙經』には「肺熱病者。先凄凄然厥。起皮毛。惡風寒。舌上

黄。身熱。熱爭則喘咳。痛走胸膺背。不得太息。頭痛不甚。汗出而寒。丙丁甚。庚辛大大汗。氣逆則丙丁死。刺手太陰陽明。出血如大豆。立已」とあり、『素問』刺熱論篇には「肺熱病者、先漸然厥、起毫毛、惡風寒、舌上黄、身熱、熱爭則喘欬、痛走胸膺背、不得大息、頭痛不堪、汗出而寒、丙丁甚、庚辛大汗、氣逆則丙丁死、刺手太陰陽明、出血如大豆、立已」とある。これらから『明堂』条文と『黄帝内經』に關連を見いだすことができる。

④その他、「尺澤」や「少商」には『外臺秘要方』にのみ記載される条文がみられるが、これらは甄權や楊玄操の『明堂』からの引用を含んでいることが予想される。

(日本鍼灸研究会)